セルバンテス作、牛島信明訳「ドン・キホーテ後篇(1)」岩波文庫、岩波書店 2001 年 2 月 16 日刊を読む

遍歴の騎士とは

１．（１）「すると何かね、床屋の親方」と、ドン･キホーテがひきとった、「この場合にぴったりあてはまるから、披露しないではいられなかった話というのがこれだったのかな？

（２）ああ、床屋さん、髭剃(ひげそ)りどんよ、篩(ふるい)の底からすかしても物が見えぬような者がいると思っておいでか！

（３）それにしても、人の才知と才知を、勇気と勇気を、美しさと美しさを、さらには家柄と家柄を比べてあげつらうのはつねに忌(いま)わしい、そして誰にもよく思われぬことだという道理が、あんたに分からぬとは、いったいどうしたことかな？

（４）親方、わしは水の神ネプトゥーヌスではないし、また自分が賢人でもないのに、人にそう思われようと努める者でもない。

（５）わしはただ、遍歴の騎士道が栄華を誇っていた、あの幸福な時代を再興しようとせぬ今の世の錯誤を世の人に悟らせたいと腐心しておるだけでござるよ。

（６）しかし、墜落したわれわれの時代にあのような至福は値しない。

（７）王国の守りも、乙女たちの庇護(ひご)も、孤児たちに対する援助も、思いあがった連中を懲らしめることも、へりくだった者たちを顕賞することも、何もかも遍歴の騎士たちが引き受け、おのが任務としてその双肩に担っていた良き時代が享受していたあの幸せを受ける資格は今の世にはないのじゃ。

２．（１）昨今の騎士の大多数は、身に着けた鎖帷子(くさりかたびら)をきしませるよりも、金襴(きんらん)や緞子(どんす)のごとき豪華な織物の衣ずれの音をたてている。頭から足の先まで甲冑(かっちゅう)で鎧(よろ)い、厳しい風雨にさらされながら野天で眠るような騎士はもはやいない。

（２）かつて遍歴の騎士たちがしていたように、鐙(あぶみ)から足をはずすことなく、馬上で槍(やり)に身をもたせかけたまま、いわゆる仮眠だけで夜を過すような騎士はあとを絶った。

（３）さらにまた、この森を出てあの山に分け入り、そこから今度は、ほとんどの場合、時化模様(しけもよう)の海を前にした人気(ひとけ)のない荒涼とした浜辺を踏みしめ、その岸辺につながれている櫂(かい)もなければ帆もマストも索具もない小舟を目にすると、豪胆にもそれに跳びのり、その舟を空の高みに持ちあげたかと思うと、すぐにまた深淵(しんえん)に突きおとすかのような、底知れぬ大海の哮(たけ)り狂った大波に身に投げ出すような勇壮な騎士、そして、このような抗しがたい嵐に昂然(こうぜん)と立ち向かっているうちに、いつの間にか、乗り出した浜から三千レグア以上も離れた場所に達し、その見も知らぬ遼遠(りょうえん)の地におりたつと、そこで羊皮紙に書かれるよりはむしろ青銅に刻みつけられるにふさわしい数々の冒険に遭遇するような騎士はもやはいない。

（４）それどころが現在では、怠惰が勤勉に対して勝利を収め、無為が艱難辛苦(かんなんしんく)にとってかわり、悪習に徳行が凌駕(りょうが)され、傲慢(ごうまん)が勇気を追いやり、はたまた、かの黄金の時代に遍歴の騎士たちのあいだにおいてのみ生彩を放っていた武芸の実践にかわって、理屈ばかりが時(とき)を得顔(えがお)じゃ。

３．そうでないと思うなら、言ってもらいたい。

（１）あの雷名とどろくアマディス・デ・ガウラより勇敢にして律儀な騎士がござるか？

（２）パルメリン・デ・イングラテーラほど思慮分別に富んだ騎士がござるか？

（３）いったい誰がティランテ・エル・プランコほど寛大にして従順でござるかな？

（４）誰がリスアルテ・デ・グレシアほど伊達（だて）にして洒脱（しゃだつ）でござるかな？

（５）ドン・ベリアニスほど数多くの刀傷を負い、また負わせた騎士がござるか？

（６）ペリオン・デ・ガウラほど大胆不敵な者が

（７）フェリスマルテ・デ・イルカニアほど危険を恐れぬ者が

（８）また、エスプランディアンほど誠実な者が、いったいどこにござるかな？

（９）ドン・シロンヒリオ・デ・トラシアほど恐れを知らぬ騎士がござるか？

(10) ロダモンテほど勇猛な騎士がござるか？

(11) ソプリーノ王よりも慎重な者がござるか？

(12) いったい誰がレイナルドスほど果敢でござるかな？

(13) ロルダンに優る無敵の騎士がござるか？

(14) かの大司教テュルパンが著した『宇宙形状誌』が伝えるところの、フェラーラ公爵家の鼻祖（びそ）たるルジューロほど凛々（りり）しくも慇懃（いんぎん）な者がござろうか？

４．司祭殿、いま挙げた騎士たちや、ほかにもさらに挙げうる卓越した騎士たちは、いずれも遍歴の騎士にして、騎士道の光輝であり栄誉でもありました。

P.35 ～ 38

＜コメント＞

2016 年に没後 400 年を迎えるスペインの大作家、セルバンテスの主著「ドン･キホーテ」を岩波文庫（全 6 冊）で読み始めて 4 冊目となった。読み進めていくうちに、セルバンテスは「遍歴の騎士」であるドン･キホーテを通して騎士道とは何か、人のため、世のために生きるとは何かを後世の人々を含め世の人々に問うているのではないかと考えるに至った。ノブレス･オブリージュ（noblesse oblige）、高貴なる者に伴う義務とは何かを考えるときにも参考になる。セルバンテスの没後 400 年に出された世界の名作「ドン・キホーテ」を是非御一読を。

― 2016 年 7 月 14 日（木）　林　明夫記―